

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇一三年(平成二十五年) 四月三〇日
第一號(通卷第二十三号)

●目録

巻頭言

〇二 研究格差

川合 康三

〇四 道徳における感情主義再評価の

世界的潮流のなかで

— 東西方哲學中的「情」與「Emotion」

國際學術研討會參加記—

橋本 昭典

〇六 「中国簡帛学國際論壇2012・秦簡牘研究」

參加報告

草野 友子

〇八 国内学会消息(平成二十四年)

一九 委員会報告

二〇 二〇一三・二〇一四年度

役員/各種委員会委員一覧

二一 事務局より

二二 「日本中国学会報」論文執筆要領

二三 第二回若手シンポジウム開催の予告

二四 第六十五回大会開催のお知らせと

研究発表募集

編集●九州大学人文科学研究院中国文学 竹村則行

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

メールアドレス: takemura@lit.kyushu-u.ac.jp

発行●日本中国學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

ファックス: 03-3251-4853
メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org



研究格差

理事
長
川合
康三

昨年10月、大阪市立大学における第64回大会が終わった翌日の8日、夕刻になって日本中が珍しく明るいニュースで沸き立ちました。山中伸弥教授のノーベル医学・生理学賞受賞です。自宅の洗濯機をかみこんでなおしていたところへ受賞の知らせが届いたという山中教授は、その夜の会見のなかで潤沢な研究費を受けていることへの感謝の思いを語っておられました。それがアメリカなどと肩を並べることができる額であるかどうかはともかく、少なくとも国内では恵まれた条件なのでしょう。もちろん研究費があれば教授の成果が達成できるわけではありませんが、十分な研究費がなければ成し得なかったであろうことも確かです。山中教授をはじめとするスタッフの卓越した能力とたいへんな努力、それが研究費という条件と結びついたところに結実したといえるでしょう。

その二日前の大会では、21世紀COEプログラム「日本文学研究の世界的拠点の構築」について二松学舎大学の佐藤進教授から、グローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」について関西大学の吾妻重二教授から、それぞれ詳しい報告がなされました。いず

れも大きな成果をあげ、且つその成果が高い評価を受けたことは嬉しい限りです。佐藤教授、吾妻教授をはじめとする関係された方々にお祝い申し上げるとともに、その労をねぎらいたく思います。

こうした重点的な研究費を受けることによって、そうでなければできない研究が開けるのはたいへんありがたいことです。わたし自身も以前、21世紀COEプログラムの一部を受けて京都大学国文学研究室の大谷雅夫教授とともに、和漢聯句読解の共同作業に取り組んだことがありました。その後さらに大谷教授を代表とする科研費によって継続し、つごう九年をかけて数冊の本を刊行しました。こんな機会を与えられなかったら、和漢聯句という、中国古典詩と日本の連歌が一体となった世にも奇妙な文学形式に触れることはなかったでしょう。また国文学と中国文学の研究者が顔をつきあわせて一つのテキストを読むという経験もはなはだ新鮮で、おおいに刺激されました。ついでに言い添えれば、資金に乏しい日本では大規模なシンポジウムや学会は中国・台湾ほど盛んではありませんが、公的・私的な読書会はとても活発で、これはわたしたちが誇るべき、そして今後もいっそう盛んにすべきことと思います。

大規模なプロジェクトでは若い研究者が大きな力を発揮し、それぞれに成果を蓄積していくというのも、余得の一つです。日頃つきあいのなかった国文学の人たちのなかの逸材に目を見張ったり、何年か続けている間にみるみる成長していくのを目の当たりにしたり、そしてまた共同研究に携わったことも多少の功を奏したのか、そのなかの人たちが研究職を得ていくのもうれしいことです。

しかしながら、限られた研究機関に重点的に多額の研究費を配分するというのは、もともと理系の発想ではなかったでしょうか。高額の研究費がなければ何もできないのであろう理系分野では、世界の最先端に立つ成果を生むためには、集中的な配分が効率のよい方法なのだろうと思われまふ。少しずつ広く分けたのでは、どこも中途半端な結果になってしまいます。ただ、重点を設ければ、当然「軽点」も生まれます。研究機関による格差が生じます。これは果たしてわたしたちの分野にとってはどんなものなのでしょうか。

理系とはまず研究の内容、性格に違いがあります。理系のなかにも時の流れと関わりなく、どうしてそんな研究を

しているのかわからないようなことを続けているうちに、そこから予想もつかなかった成果が生まれる、というケースもあるに違いありません。しかし重点配分されるのは、世界中が先を争ってしのぎを削っている分野です。その際、研究の対象も目的も、世界のどこの研究者、研究機関も同一なのではないでしょうか。一方、わたしたちの分野では一つの課題に向かって多くの研究者が血まなこになるということは、滅多にありません。むしろ逆に研究対象も方法もさまざまであり、さまざまであることから多様な研究が生まれる、そこに大きな意義があります。つまり理系では一極集中しなければ勝ち抜けないのに対して、文系、とりわけ中国の文学や哲学においては、研究の多様性にこそ意味があると思うのです。重点、軽点を作ることはその多様性を否定することにつながりはしないか。

かといって、COEのような大型プロジェクトは不要だというわけではありません。二松学舎大学でも関西大学でも、それを機にそうでなければできない共同研究が可能となり、そうでなければ生まれない成果が得られたことでしょう。そのことにも大きな意義があるのは確かです。しかしそれを遂行している時に、おそらく当事者でなければわからない苦労が伴ったのではないのでしょうか。大会での報告のなかで吾妻教授が「もう倒れるかと思いました」と漏らされた言葉が記憶にのこります。大規模な共同研究を進めるにあたって、過酷な負担を押しつけられた様子が知られます。研究が辛いわけはありません。新たな領域の研究を進め、次々と新たな成果が生まれるのは、大きな喜びであったに違いないのです。ただそれに伴う雑務に担当者はいへんな負担を負わせられたのではなかったかと推測されるのです。

大型予算にはそのプロジェクトを遂行するための事務経費が含まれます。若い研究者をそれによって雇用できるのが、ありがたいことの一つではあります。とはいえ、それは共同研究の期間中に限られます。いやな言葉でいえば、一時しのぎにすぎないのです。中心となるスタッフは平常の仕事に支障をきたすほどの過酷な負担を強いられ、雇用された研究者は計画が終われば解雇される、そういう負の側面があることに目をつぶることはできません。

この分野の研究と教育が今後も継続し発展していくために必要な処置は、大規模な予算の投入だけではないと

思うのです。安定して研究や教育に専念できる場を増やすこと、それこそが何より肝要なのではないでしょうか。今、たくさんの若い人材が苦しい条件のもとで、いつ就職できるのかわからない不安のなかにいます。経済的な不利だけではありません。図書の相互利用などは以前より広がっているとはいえ、研究機関に所属していないことは、研究を進めるうえでさまざまな不利を強いられるのです。そういう「研究格差」があることが大きな問題なのです。すぐれた人材が経済的にも研究上も不公平な格差のなかに置かれ、しかもそのなかにあってそれぞれの研究を続けている――胸が痛むなどといってすまされる問題ではありません。

これは決してわたしたちの雇用確保、研究の保証を求めるだけの身勝手な要求ではありません。若い人たちが研究の場すら持たないこと、それによって次世代の研究が育たないことは、日本の文化全体にとって、あとになったら取り返しのつかない事態を招きかねません。学会として何ができるのか。まずはこの現状を声を大きくして叫ぶほかありません。

ではひとたび大学に定職を得られたら、研究・教育に打ち込むことができるのか。問題はそこにもあります。個人の処理能力を超えるほどの膨大な雑務、それに加えてわずかな採択を目ざしての研究費申請の書類作り、やっと得られた研究条件を生かすための時間が今度は奪われてしまいます。大学のなかも惨憺たるありさまなのです。そんな先行きを見越して、有為の人材が学を絶ってしまうことすら出てきています。

最近、鳥居龍蔵の自伝が岩波文庫に入りました（『ある老学徒の手記』）。その解説に田中克彦氏を書いておられるように、鳥居は「小学校しか出ていない」のではなく、「小学校すら出ていない」独学の人だったのです。正規の階梯を登れなかった彼は、人類学の草分けであった東京帝国大学坪井正五郎教授の厚意で「資料整理係」として出入りを許されるところから出発します。しかし研究に対する情熱はまるで物に取り憑かれたかのように、関連する諸学を独りで吸収し、東アジアのあちこちを次から次へとダイナミックに踏査していきます。彼にとっては至る所、宝の山だったのです。新しい分野が生まれる時の熱気に触れると、研究とは本来こうした力と喜びにあふれたものなのだというのを改めて思い起こします。

道徳における感情主義再評価の 世界的潮流のなかで

— 東西方哲學中的「情」與「Emotion」 國際學術研討會參加記 —

奈良教育大学
橋本 昭典

2012年8月24日、台湾大学哲学系と高麗大学哲学研究所のコラボレーションによる「東西方哲學中的「情」與「Emotion」國際學術研討會」が台湾大学において開かれた。この日は数日前に発生した台風14号(天秤)が台湾を直

撃することが予測され、また続く15号(布拉萬)もやや遅れて台湾北部へ上陸する可能性が指摘され、会期延期も困難とされた。筆者は前日の23日に渡航予定であったが、主催者側の要請もあり、大事をとって急遽、渡航を一日早めた。到着した日の夜は、激しい暴風雨で、開催が危ぶまれたが、結果として両台風の進路がそれぞれ予想より大きく南と北へそれ、翌日には風雨は収まった(14号が上陸した台湾南部には被害が出た)。韓国からの一行は予定通り前日の来台となったが、無事の到着であった。なお、台湾大学哲学系は少し西に離れた水源キャンパスに移転しており、会場もこちらとなった。

今回の会議は、高麗大学における「情」に関する比較哲学プロジェクトによって企画されたものであり、会の題が示すように、発表・討論は中国思想に限るものではない。そこで、どのような発表が行われたのか、その全容を紹介しておきたい。

台湾大学哲学系主任の苑舉正氏(科学哲学)の挨拶のあと、基調講演として李承煥氏(高麗大学)の「朱熹理學中的「符號布置方式」及朝鮮儒學之分歧」と題する発表が行われた。氏は朱子の思惟構造を「横説」「豎説」「発説」の三種と捉え、そこから「情」や「欲」の生起を説明する。「理」と「氣」が「対比關係」にある「横説」では、「理」が道徳を志向し「氣」が「情欲」へと向かう。「理」が「氣」の上部構造として「乗伴」する「豎説」では、両者の「共変」作用から「情欲」が生まれる。未発の「性」が「已発」する「発説」では、「情欲」は「已発」から生じる。朱子に見られるこの三種の思惟構造のうちどの立場に拠るかによって後世、論争が起こるとし、朝鮮儒学における李退溪と李栗谷の論争もまたこれに起因するとする。この講演に対し、李賢中氏(台湾大学)の進行のもと、杜保瑞氏(台湾大学)及び会場から、この三種の思惟構造が朱子その人に見出し得るか、李退溪の説く四端七情説は朱子の思想であるか、奇高峰との四端七情説をめぐる論争についてはどうか、台湾の最新の研究(具体的な内容に言及されなかったが、おそらく李明輝氏の成果と思われる)との相違点をどう捉えるか、高橋亨の朝鮮儒学理解についてなどの質問が出され、活発な議論となった。



基調講演(主催者提供)

続いて研究発表が行われた。最初は、梁善伊氏(ソウル大学)のジェシー・プリンツ(ノースカロライナ大学)の最新の感情理論である「Valence(結合価)」をめぐる発表であった。プリンツは感情が道徳的判断の大きな要因であることを主張する感情主義の立場にあるものの、直観的な感情による道徳判断には慎重な態度をとり、認知心理学や脳神経科学の成果を援用しながら、あらゆる感情が判断と結合していることを主張する。このようなプリンツの理論に拠りながら氏は「怖いけれども惹かれる」といったアンビ

バレントな感情が同時にそれぞれ判断と結びついていることを明らかにした。この発表に対しては、梁益増氏(台湾大学、精神哲学・存在論)がコメントを行った。

続いて、蘇秉一氏(高麗大学)がヘーゲルの感情理解から、理性と感情の二元論をそれぞれの透過を通して超克すべき可能性を模索し、高炫範氏(高麗大学)がカント哲学における感覚、受動、情念といった概念の分析からその感情論の位置づけを図る発表を行った。それぞれ楊植勝氏(台湾大学、美学・ヘーゲル哲学)、「康德与孔子美学比較初探」の著作もある、C.H.ヴェンツェル氏(台湾大学招聘教授、カント哲学)がコメントを行った。

韓国人発表者の最後は、黄鎬植氏(高麗大学)の「The Category of Emotion in Mencius Ideas and Its Cognitive Aspect」であった。『孟子』滕文公篇に記された、親を葬る慣行のなかった時代、捨て置いた親の遺体の損傷の酷さを見て、子が冷や汗を流すというエピソードを取り上げ、ウィリアム・ジェームズ『心理学の諸原理』の定義にそって、氏は孟子が認知主義者であると結論づけた。孟子は、冷や汗を流すという身体的反応と土で遺体を埋めるという帰結の振舞いを記すのみで、それに伴う感情への言及を行わないことから、ジェームズの情動理解に親しいと言うのである。この発表に対しては、コメンテーターの佐藤将之氏(台湾大学)により感情への言及がないことの取扱いには『孟子』の記述上の問題も含め慎重な態度が必要との提議がなされた。

続いて、筆者が「儒教道徳與情感主義—情感與行爲的一致—」の発表を行った。『論語』の「父子相隠」「三年の喪」「怨むこと」の考察、『孟子』の「姿を見ていない羊を犠牲としてよいとの判断」「舜の父に対し取るべき態度」などの検討から、孔孟の規範は、人が最初の瞬間に抱く情感にもとづく「情感主義」であるとした。そしてこの道徳情感主義が後世、見失われてしまうのは、孔孟の時代には「情」という概念が未形成であったことが気づかれず、その時代に善き感情の意味を担っていた「仁」が徳目化したことにあるとした。筆者の発表には「論戦国時期「情」概念的発展」の著作がある王志楯氏(政治大学)がコメントを行い、会場から『孟子』『荀子』の「情」の定義についてなどの質問が出た。

最後に、大阪大学招聘研究員として中央研究院に派遣されていた池田光子氏が「關於中井履軒從「性」到「徳」的歷程」の発表を行った。人間性を定義するうえで最大の問題となるのは「情」である。善へと志向すべき人間を阻

害する悪しき「情」をどう位置づけるか。古くて新しいこの問題を履軒において検討し、結果、履軒は「情」を「思い邪なし」という人の自然な感情と捉えており、よって「性」→「情」→「才」→「徳」という他の儒者にはない人間観を有していたという。これには金原泰介氏(台湾・雲林科技大学)がコメントを行った。

以上が本会での発表であるが、その内容は最新の感情理論から、カント、ヘーゲル、孔子、孟子、朱子、李退溪、中井履軒と、時代、地域を異にするものであった。しかし、個々に独立して見える発表も通観すると、共通した問題点が浮かびあがってくる。それは人間性を定義するにせよ、道徳判断の基準を求めるにせよ、「感情」が避けがたく有する「negative」な要素をどう扱うかという問題である。道徳の哲学において感情主義が復権することには常にこの「negative」の超克が含意されていた。思想界において感情主義再評価の気運が高まるなか、小規模ではあるが、極東に位置する三地域の研究者が集い、プリントなど最新の成果(本邦訳による紹介はまだない)とともに西洋哲学、中国思想、日本思想における「情」が同列に論じられた本会において、まさにこの点が確認されたことは大変意義深いことであった。今後このような場が一層の広がりを見せることを期待したい。なお、本会の発表・討論は英語、中国語によるものであったが、議論が白熱すると英語、中国語、韓国語が飛び交うこともあった。このような場をより実りあるものにするためには語学力の研鑽が必要であることを自戒の念を込めて付言しておきたい。



記念写真(主催者提供)

「中国簡帛学国際論壇 2012・秦簡牘研究」 参加報告

草野 友子

日本学術振興会特別研究PD

2012年11月17日～19日、中国・武漢において、「中国簡帛学国際論壇2012・秦簡牘研究」が開かれた。「中国簡帛学国際論壇」とは、2006年から武漢大学簡帛研究中心が主催している国際学会であり、今回はその第六回に当たる。

武漢大学簡帛研究中心は、2005年に創設された出土文献専門の研究機関であり、学術交流、国際学会の開催、研究書や機関誌『簡帛』の刊行といった活動を精力的に行っている。また、「簡帛網」というウェブサイトを運営し、最新の情報を発信するとともに、研究発表の場を提供している (<http://www.bsm.org.cn/>)。

今回の学会は、北京大学出土文献研究所との共同開催で、武漢大学がある珞珈山のふもと、東湖に臨む珞珈山賓館の会議室がその会場であった。「秦簡牘研究」という副題のとおり、秦代の簡牘資料を中心に、戦国簡・漢簡などの周辺資料をも含んだ研究発表が行われた。武漢大学簡帛研究中心は、2008年より「秦簡牘の総合整理与研究」というプロジェクトを進めており、秦代の簡牘資料の再整理と研究を継続して行っている。一方、北京大学は、2010年1月に秦代の簡牘を入手し、現在、整理と研究が

進められている。また、2010年12月からは湖南大学岳麓書院所蔵の「岳麓書院藏秦簡」、2012年1月からは湖南省文物考古研究所所蔵の「里耶秦簡」の刊行が開始されるなど、相次いで新資料が公開されており、秦簡の研究は隆盛を極めている。本学会は、そうした新資料の整理・研究に携わっている研究者も多数参加していたため、公開済みの資料のみならず、未公開の新資料についても研究発表がなされ、最新の研究に触れる絶好の機会となったのである。

本学会は、武漢大学の陳偉教授、北京大学の朱鳳翰教授の開会の辞で幕を開けた。参加者は中国・台湾・日本・韓国・アメリカ・ドイツ・カナダ各国の研究者で、40名あまりが研究発表を行った。三日間で十のセッションが生まれ、分科会の形式は取られず、すべて同一の会場で発表が行われた。各セッションの発表者は三～五人、一人あたりの発表時間は20分、北京大学藏秦簡牘(以下、北大秦簡)などの新資料に関する発表のみ25分であった。発表形式は、はじめに発表者による口頭発表が行われた後、討論の時間が設けられるという、中国の学会の一般的なスタイルである。日本人の発表者は、藤田勝久教授(愛媛大学)、角谷常子教授(奈良大学)、大西克也准教授(東京大学)、廣瀬薫雄副研究員(復旦大学)と筆者の五名であった。

今回の研究発表の中で特に注目されるのは、北大秦簡と里耶秦簡である。

北大秦簡は、竹簡762枚(そのうち約300枚は両面に書写)、木簡21枚、木牘6枚、竹牘4枚、木觚1枚、木牍1枚、算筹61根、および若干の竹簡残片が含まれている。北京大学に収蔵された時点で、多くの簡冊が出土時の状態(巻かれた状態)を保っていたとされる。その内容は、政治・地理・社会経済・文学・数学・医学・暦法・方術・民間信仰などの領域に関連するものである。本学会では、『公子従軍』(女性の口述形式で、夫である「公子」に対する深い愛情と恨みの心情を表現)、『隱書』(隠語を記録した書、『漢書』芸文志「詩賦略」に見える佚書、『隱書』18篇と考えられる内容)、『算書』(張家山漢墓竹簡『算数書』・岳麓書院藏秦簡『数』、伝世文献の『九章算術』と類似)、『祓除』(祓除の儀式と祈禱時に使用する祝文について記載、『算書』の背面に書写)、『秦原有死者』(死者が蘇り、死後の世界

と埋葬時の注意事項などを述べるという内容、天水放馬灘秦簡『志怪故事』と類似)に関する研究発表が行われた。北大秦簡の概要と一部の写真図版は、北京大学出土文献研究所「北京大学藏秦簡牘概述」(『文物』2012年第6期)などにすでに掲載されているが、正式な公開が待たれる。なお、北京大学は2009年1月には漢代の竹簡を入手しており、先頃『北京大学藏西漢竹書(二)』(『老子』卷)(上海古籍出版社、2012年12月)が刊行された(第一巻より先に、第二巻の『老子』が公開)。今後の北京大学所蔵簡牘の研究動向は注目される。

里耶秦簡とは、2002年に湖南省龍山県里耶古城遺址一号井から出土した約38000枚の簡牘と2005年に北護城壕十一号坑から出土した51枚の簡牘を指す。その内容は、主に秦代の地方行政文書であり、秦代の法律・制度の実態や社会構造を解明するのに重要な手がかりを提供している。里耶秦簡は、2012年1月に『里耶秦簡(一)』(湖南省文物考古研究所編著、文物出版社)が刊行されると同時に、『里耶秦簡校釈(一)』(陳偉主編、武漢大学出版社、2012年1月)も刊行され、活発に研究が行われている。本学会において里耶秦簡の研究発表が最も多かったこともそれを象徴しており、法律・制度・歴史・地理・文字など、幅広い分野の研究成果が発表された。

朝から夜までぎっしり詰まった会議日程であったが、二日目の午後は、黄鶴楼・帰元寺見学や長江遊覧といった武漢の観光名所をめぐる時間が設けられ、しばし休息の時間が与えられた。

閉幕式では、北京大学の李零教授、武漢大学の李天虹教授が本学会を振り返るとともに、今後の研究の活性化に期待を込めた辞を述べ、三日間の学会がここに終幕した。

私事で恐縮であるが、最後に筆者が本学会に出席するに至った経緯を述べておきたい。筆者は2011年11月より一年間、武漢大学簡帛研究中心の訪問学者として在外研究を行った。当初の予定では、この学会の前に帰国することになっていたのだが、会議日程を知って、急遽滞在を一週間延長した。さらに、陳偉教授のご厚意で研究発表の機会を与えていただき、最終三日目の最終発表という大役を任せ付かることとなった。学会中は多くの先生方と交流させていただき、夢見心地のまま、その二日後に帰国の途に着いたのである。

実は、武漢の学会の直前の2012年10月27日・28日、北京大学中国古代史研究中心主催の「簡牘与早期中国」學術研討会(第一屆出土文献青年学者論壇)にも筆者は招待していただき、発表する機会を得ている。この学会は、出土文献研究に取り組む若手研究者の研究発表と学术交流の場を提供するという主旨のもとで開催され、同世代の研究者と交流できたことで、非常に刺激を受けた。今後こうした学会に積極的に参加していきたいと考えている。

中国に滞在中、日中両国間の緊張が高まっていた時期もあったが、筆者自身はほとんど影響を受けることがなく、非常に恵まれた環境の中で一年間を過ごすことができた。関係者各位には、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。



会場の様子(筆者撮影)



❖ 国内学会消息 (平成二十四年)

北海道中国哲学會

◎例会

5月12日

- ・金文研究を通じた中国の歴史・思想・經書解釋に對する研究の試み

北海道大學大学院文學研究科専門研究員 和田 敬典

- ・奇門遁甲書と類似曆の研究

北海道夕張高校教諭 猪野 毅

6月2日

- ・日中戦争期における胡適の主張の變化および在米講演活動の研究

北海道大學大学院文學研究科専門研究員 猪野(胡)慧君

6月29日

- ・孟子・荀子から韓非子へ

元北海道工業大學教授 室谷 邦行

10月26日(卒業論構想發表會)

- ・吉田松陰の經世論

武石 智典

11月2日

- ・朝鮮の儒學 上智大學文學部史學科教授 山内 弘一

- ・臺灣における研究生活

臺灣雲林科技大學漢學資料整理研究所助理教授 金原 泰介

2月16日(北海道大學大学院文學研究科特別講演)

- ・徳川時代における國學者の『易經』研究—平田篤胤を中心として—

香港中文大學日本研究學系教授 吳 偉明

◎研究發表大會

第42回研究發表大會竝總會

7月28日 於人文・社會科學總合教育研究棟W308

- ・竹簡本『孫子』用間篇末尾に關する考察 木村 清順

- ・『天主實義』における儒教とキリスト教の議論—理をめぐる議論を中心として—

東京大學大学院人文社會系研究科研究生 文 盛載

- ・荻生徂徠の「道」について

趙 熠焯

- ・山鹿素行における武士道論と兵學思想について

張 捷

(近藤 浩之 記)

北海道大學中國語・中國文學談話會

第236回 (2012年1月28日)

- ・晩清小説に見る洋行買弁の形象

商 磊

- ・魏晉文學における男色の性格について

倉 雅晨

- ・『拍案驚奇』における「V得」と「V了」について

成田 廣子

第237回 (2012年2月18日)

[卒業論文發表會]

- ・風箏と李漁—『風箏誤』の中の風箏について—

今 聡子

- ・『駱駝祥子』と『蝴蝶』における名詞性連體修飾語と構造助詞「的」

中原 愛弓

第238回 (2012年11月24日)

[修士論文中間報告會]

- ・『初刻拍案驚奇』における「V得」と「V了」について

成田 廣子

- ・『殺狗記』について—狗を殺すくだりを中心に—

吳 秀娟

- ・萬瓜俱に備われど、ただ南瓜のみ缺く—『西遊記』における南瓜問題について

毛 文

- ・小説「金玉奴棒打薄情郎」から京劇『金玉奴』に至るまで—「金玉奴ものがたり」の變容について

池田 眞衣

◎刊行物

『饕餮』第20號(2012年9月)

『火輪』第31號(2012年3月)・第32號(2012年9月)

『連環畫研究』第1號(2012年3月)

(加部勇一郎 記)

秋田中国学会

◎平成24年度春季秋田中国学会第154回例会

平成24年5月19日(土)、於秋田大學総合研究棟二階講義室

- ・先秦漢語における「未然構文」—『左伝』のいくつかの動詞に關するまとめ

杉田 泰史

- ・台湾の經學と春秋學—台湾大學「經學與文學國際學術研討會」に参加して

吉永慎二郎

◎平成24年度秋季秋田中国学会第155回例会
 平成24年12月1日(土)、於秋田大学総合研究棟二階講義室
 ・メディアから見た中国の国家戦略 松本 翔
 ・中国の大学教員生活で考えたこと 高橋 三男
 (吉永慎二郎 記)

SENDAI 漢籍 SEMINAR「東北大学における漢学」

3月9日
 ・古籍の帰還もしくは孝経の蒐集—武内義雄名誉教授旧蔵書と狩野文庫— 三浦 秀一
 ・ふみといしぶみの六祖慧能—常盤大定旧蔵拓本コレクションを中心として— 齋藤 智寛
 (高橋 睦美 記)

東北シナ学会例会

◎2月例会 2月21日・22日
 (卒業論文・修士論文発表会、中国思想・中国文学分野のみ抜粋)
 [卒業論文発表会]
 ・『莊子』における「物化」について 今井 雅之
 ・秦観詩用韻考 加藤 明希
 ・『律条公案』と『包公案』における類話の差異と構造に関する研究 堀川 慎吾
 ・何心隠の思想—その講学思想について— 小山 督理
 ・『聊齋志異』の描く女性群像の研究 伊藤亜有美
 ・『儒林外史』研究 中福絵美華
 ・茅盾『子夜』と横光利一『上海』の比較を通してみる上海 福長 悠

[修士論文発表会]
 ・『詩経』解釈学史研究 小松崎宏明
 ・曹操楽府文学研究 劉 月陽
 ・翁葆光の『悟真篇』解釈とその周辺 金子 由佳
 ・黄宗羲の思想—「自得」の追究と『明儒学案』の立場— 豊島ゆう子
 ・錢穆の文学観について 程 遠
 ・漢字文化圏地域における文字を中心とした言語政策の研究 相馬 賢一

◎4月例会 4月21日
 [新入生歓迎会]
 ・謝靈運「南亭に遊ぶ」詩を読む—最古の注釈である李善注に従った場合— 佐竹 保子
 (高戸 聡 記)

東北大学中国哲学読書会

◎第170回中哲読書会 3月24日
 ・蘇軾と『論語』 田中 正樹
 ◎第171回中哲読書会 7月22日
 ・唐玄宗御注御疏における「沖和」 高橋 睦美
 ・江南地域における戴震経学普及の背景 尾崎順一郎
 ◎第172回中哲読書会 9月21日
 ・日本の中国思想研究における《老子》と法家の関連性について 許 建良
 ◎第173回中哲読書会 10月12日
 [卒業論文構想発表会]
 ・程明道の万物一体の仁について 浅利 真行
 (高橋 睦美 記)

東北大学中国文学談話会

◎平成24年度 第1回中国文学談話会 8月6日
 [卒業論文構想発表会]
 ・中国文学に見る書家 王羲之 茂林 友紀
 ・『太平広記』畜獣の部について—古代中国小説に描かれる動物たち— 中山 大地
 ◎平成24年度 第2回中国文学談話会 11月17日
 [卒業論文中間発表会]
 ・中国文学と書家—文学から見る王羲之についての一考察— 茂林 友紀
 ・『太平広記』畜獣の部について—古代中国小説に描かれる動物たち— 中山 大地
 (高戸 聡 記)

筑波中国学会

◎例会
 5月24日(木)
 ・王漁洋の詞論—神韻の淵源を求めて 荒井 禮
 5月31日(木)
 ・王績「古意」六首初探—「古」の視座と社会への対峙 加藤 文彬
 9月20日(木)
 ・『呂氏家塾読詩記』における朱熹の詩説について 重野 宏一
 9月27日(木)
 ・李白詩における「風」の諸相 逆瀬川彰子

11月1日(木)

- ・王維における裴迪—桃花源認識を手掛かりとして
齋藤 聡

11月8日(木)

- ・『聊齋志異』画壁について
高橋 恒輔

12月20日(木)

- ・陶淵明「自祭文」初探—普遍的な死と個別的な死
加藤 文彬

◎刊行物

『筑波中国文化論叢』第31号(10月)
(稀代麻也子 記)

お茶の水女子大学中国文学会

◎大会 4月28日(土)

- ・現代中国語受動態における副詞の指向性について
伊藤さとみ
- ・余華、暴力、死と意味の呪縛
宮尾 正樹

◎7月例会 7月7日(土)

- ・中国の薬名詩と日本の薬名文について—「徐長卿伝」を中心に
三瓶はるみ
- ・“的”構造の一考察—テキスト言語学の視点から
譚 昕

◎9月例会 9月1日(土)

- ・“其实”の語用的機能の分析
石井 友美
- ・1960年代台湾において〈作家〉を志す青年たち—鄭清文、黄春明、七等生を中心に
西端 彩

◎12月例会 12月1日(土)

- ・翻訳から見る台湾国語の“会”について
鄭 文琪
- ・楊振声「抛錨」・石華父『海葬』・柯霊『海誓』をめぐる—恋愛と復讐の変奏
杉村安幾子
- ・認知言語学の視点から見る「把」+B+V在L」構文と「在」+LVO」構文
曹 泰和
(宮本めぐみ 記)

中国文化学会

◎大会

6月30日(土) 於京都教育大学

[研究発表]

- ・陶淵明「擬古」詩初探
文教大学大学院 宇賀神秀一

- ・王績「古意」六首考
筑波大学大学院 加藤 文彬
- ・王漁洋の『花草蒙拾』について
筑波大学大学院 荒井 禮
- ・晩唐期における杜詩の影響—韓偓
函館工業高専 鳴海 雅哉
- ・前漢期における春秋観の一側面
千葉大学 内山 直樹
- ・それから—電影初到上海之後
文教大学 白井 啓介

[シンポジウム]

「教材としての『史記』」

- 基調講演 京都教育大学名誉教授 青木 五郎
- 発言者 静岡県立浜松南高校 安立 典世
- 発言者 京都府立桃山高校 谷川 司
- 司会・コメンテーター 京都教育大学 谷口 匡

◎例会

3月10日(土) 於大妻女子大学

- ・漢代博文の書法について—篆書系有紀年博の変遷を中心に
筑波大学大学院 安生 成美
- ・杜甫「清新庾開府」をめぐる問題
文教大学 樋口 泰裕

5月12日(土) 於大妻女子大学

- ・「百歩洪二首並叙」其一に見える蘇詩の博喻と賦の技法
文教大学大学院 王 連旺
- ・近体詩平仄式の機械的説明法
元北陸大学 桜田 芳樹

9月30日(日) 於大妻女子大学

- ・唐代の詩と阿倍仲麻呂歌との関係について
大妻女子大学 増野 弘幸
- ・『經典釈文』における「依字」について
筑波大学名誉教授 向嶋 成美

12月8日(土) 於大妻女子大学

- ・『呂氏家塾讀詩記』における朱熹の詩説について
筑波大学大学院 重野 宏一
- ・杜甫「兵車行」における「耶孃妻子」について
北海道教育大学 大橋 賢一
(阿川 修三 記)

六朝学術学会

◎例会

3月17日(土)第24回研究例会 於奈良女子大学

[報告]

- ・六朝の人物評論と文藝批評

京都大学大学院 成田健太郎

- ・陶謝詩における身体表現

愛知教育大学 堂蘭 淑子

- ・徐陵と庾信の駢文について

京都大学 道坂 昭廣

12月8日(土)第25回研究例会 於二松学舎大学

[報告]

- ・阮籍「詠懐詩」にみえる感情表現の特質

お茶の水女子大学大学院 鄭 月超

- ・六朝期の納涼を描く詩について

早稲田大学非常勤講師 高芝 麻子

- ・劉孝標をめぐる人々—南朝政治史における三齊豪族—

東海大学非常勤講師 榎本あゆち

◎大会

6月16日(土) 第16回大会 於二松学舎大学

[報告]

- ・魏文帝の詩歌にみえる感情表現の特質—「腸」を中心に—

二松学舎大学大学院 亀井 有安

- ・皇甫謐の著作がえがき出す出处—『高士伝』『帝王世紀』の意義—

奈良女子大学大学院 横山きのみ

- ・新王朝への態度—北齊滅亡時の士人たち—

京都大学非常勤講師 池田 恭哉

[特別講演]

- ・中国大陆六朝文学研究的趋向及我的一点看法

復旦大学 戴 燕

[記念講演]

- ・江南文化の系譜—建康と洛陽

中央大学 妹尾 達彦

◎刊行物

『六朝学術学会報』第13集(3月末日)

(大村 和人 記)

宋元文学会

I 朱子絶句研究部門

『朱文公文集』巻5、巻6所収作品を輪読(於・早大、共立女子大)。(宇野 直人、松野 敏之ほか)

II 儒教土着化研究部門

3月15日に例会を開催(於・早大)。報告「手塚治虫に見る儒教の土着化—その一」(宇野 直人)

III フランス中国学研究部門

アンドレ・レヴィ著『中国古典文学』(原題“La litterature chinoise ancienne et classique”)の和訳を開始。

(中野 茂)

IV 日本漢文学研究部門

東北、高松、下関、熊本の同人とともに、連絡網を整備中。(田山 泰三ほか)

V 近代漢詩研究部門

倉田貞美博士の研究(『清末民初を中心とした中国近代詩の研究』など)の継承、発展を目指すべく、資料を整備中。(川上 哲正ほか)

(松野 敏之 記)

日本聞一多学会

◎大会

日本聞一多学会第16回大会

2012年8月4日(土) 14:00~17:30 二松学舎大学九段下キャンパス 11階会議室

- ・嘉納治五郎と魯迅

関東学院大学[院] 荊 建堂

- ・アメリカ留学生としての聞一多と謝冰心

國學院大学 牧野 格子

◎刊行物

『神話と詩』第11号(2013年3月)

(野村 英登 記)

国士舘大学漢学会

◎第47回大会(12月22日) 於34B201室

[研修報告]

- ・蘇州大学作詩交流セミナー報告

中玉利誠一、森田 梓、鈴木 絢子

[卒論発表]

- ・『論語』研究—伊藤仁齋の仁と恕— 4年 長島勇太郎

・老舎研究—『微神』について 4年 濱野 希
 [第一回詩文朗読コンテスト]
 ・漢詩朗読部門
 ・魯迅『故郷』部門
 [特別講演]
 ・「中国古代の詩に見える女性像」
 共立女子大学教授 宇野 直人
 ◎刊行物
 『國土館大學漢學紀要』第14号
 (鷲野 正明 記)

日本漢文小説研究会

◎月例研究会 於湯島聖堂斯文会館
 5月27日
 ・森槐南『深草秋』について 荒井 禮
 7月15日
 ・芳野世育『御経伝』『了寛伝』について 荒井 禮
 12月2日
 ・『西稗雜纂』について 荒井 禮
 (鷲野 正明 記)

明清文人研究会

◎月例研究会 於湯島聖堂斯文会応接室
 4月29日(日)
 周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社
 2002年発行「年表」読解
 6月24日(日)
 周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社
 2002年発行「年表」読解
 9月16日(日)
 周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社
 2002年発行「年表」読解
 11月18日(日)
 周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社
 2002年発行「年表」読解
 (河内 利治 記)

宋詞研究會

◎詞籍提要譯注檢討會
 8月3日(金)、4日(土)(於日本大學商學部)
 『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および檢討
 ◎『唐宋名家詞選』譯注檢討會
 9月9日(日)、10日(月)(於中京大學文化科學研究所)
 龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討
 ◎小風絮會(『唐宋名家詞選』譯注)
 1月7日(土)至12月1日(土)(於立命館大學文學部中國文學
 專攻共同研究室)
 龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討
 ◎刊行物
 『風絮』第8號(3月)
 (萩原 正樹 記)

宋代詩文研究会

◎第16回宋代文学研究談話会(宋詞研究会と共催)
 2012年5月19日 於九州大学伊都キャンパス
 I 宋元交替と劉振翁 九州大学大学院 奥野新太郎
 II 陸游と『世說新語』 九州大学大学院 甲斐 雄一
 III 蘇軾没後の蘇門—「和陶詩」への意識を中心に— 九州大学大学院 原田 愛
 IV 洛陽時代の司馬光とその周辺 梅光学院大学 中尾健一郎
 V 水仙の変遷と水仙花の受容 東京大学大学院 加納留美子
 VI 題壁与記憶—試論蘇軾南行題壁詩— 国立東華大学 張 蜀蕙
 VII 趙尊嶽『珠玉詞』評点探析 国立中央大学 卓 清芬
 VIII 蘇軾「天際烏雲帖」釈文詮解 南洋理工大学 衣 若芬
 IX 陸游の夜雨の詩について—「夜中に雨を聴く」詩を中
 心として— 愛知大学 三野 豊浩
 X 東英寿教授新見歐陽脩散佚書簡解説 華東師範大学 洪 本健
 XI [座談会] 宋代文学研究の回顧と展望
 立命館大学 萩原 正樹、早稲田大学 内山 精也
 九州大学 東 英寿

◎第2回南宋江湖詩派国際シンポジウム(同科研費プロジェクトと共催) 2012年10月20日 於同志社大学今出川校地

I 『錢鍾書手稿集・中文筆記』与江湖体研究
復旦大学 王 水照

II 江湖派詩人の交流における詞の意味—特に姜夔の詞から—
日本大学 保莉 佳昭

III 論『千家詩選』与劉克莊及江湖詩派的关系
北京大学 錢 志熙

IV 書棚本唐宋小集発微
四川大学 羅 鷺

V 域外漢籍所見南宋江湖詩人新資料及其価値
南京大学 卞 東波

VI 金末元初における非士大夫層の詩作—河汾諸老とその周辺—
慶應義塾大学 高橋 幸吉

VII 日本近世の江湖詩社の盟主 市河寛齋について—『北里歌』を中心に—
早稲田大学 池澤 一郎

◎講演会
2012年12月15日 於早稲田大学早稲田キャンパス
・「白俗」論之兩宋演變及其思想文化原因
武漢大学 尚 永亮

2013年1月26日 於早稲田大学早稲田キャンパス
・唐宋文人茶的文化意蘊及其形成過程
北京大学 杜 曉勤

◎刊行物
『江湖派研究』第2輯の刊行(2012年3月)
『橄欖』第19号の刊行(2012年9月)
(内山 精也 記)

中唐文学会

◎第23回大会 10月5日 於キャンパスプラザ京都
・杜詩の俗語について 大橋 賢一
・〈炭売りの翁〉に関する二つの記録—白居易「新樂府・売炭翁」と実録の関係について— 畑村 学
・唐代の国子祭酒 三上 英司

◎刊行物
『中唐文学会報』第19号
(谷口 匡 記)

名古屋大学中国哲学研究会

◎研究会
第65回研究会(1月16日)
[研究発表]
・考察：天台山の茶—神仙道教思想を中心に—
張 名揚

第66回研究会(7月23日)
[研究発表]
・ Evolution of the Dao キング・ロバート

第67回研究会(9月27日)
[卒業論文中間発表]
・『孝経啓蒙』にみえる道教用語 石丸 羽菜
・朱熹の忠恕解釈について 服部 寛風
・『老子』と『莊子』における無為について 水野 雅之

第68回研究会(10月16日)
[修士学位論文中間発表]
・董仲舒の思想 近藤めぐみ
・『墨子』の政治及び文化の思想 山本 良平
・『老子経通考』に見える道教的要素 李 麗

◎刊行物
『名古屋大学中国哲学論集』第11号(5月25日)
(小崎 智則 記)

名古屋大学中国文学研究室

◎研究会及び講演
6月23日(土) 名古屋大学中国語学文学研究会例会
[研究発表]
・梁啓超と徳富蘇峰 李 海
・『史記桃源抄』の漢籍受容—朱子学を中心として
大島絵莉香〔講演〕

・紅樓夢の成立過程について 船越 達志
8月13日(月) 研究発表

[卒業論文構想発表]
・『山海経』について 川路 梨月
・『離魂記』と魂の関係 高山 香織
・曹操について 吉田 奈央

[研究発表]
・唐代長安香積寺の所在—『長安志』「在縣南三十里皇甫邨」に端を発する移転説について 竹内 航治

9月20日(木)

- ・市河寛斎の唐五言古詩—『談唐詩選』を中心として—

金 明蘭

11月20日(火) 卒業論文中間発表

- ・『山海経』とその受容 川路 梨月
- ・『離魂記』考 高山 香織
- ・曹操とその作品について 吉田 奈央

11月30日(金) 中国文学特別講演会

- ・五山文学と中国文学—柳宗元を中心に— 太田 亨

2月13日(水) 卒業論文発表

- ・『山海経』とその受容 川路 梨月
- ・『離魂記』考 高山 香織
- ・曹操とその作品について 吉田 奈央

◎刊行物

『名古屋大学中国語学文学論集』第24輯

昨年の『名古屋大学中国語学文学論集』第二十四輯より、本輯は紙媒体から電子テキストに切り替えました。名古屋大学中国文学研究室ホームページ(<http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/~chubun/frame.html>)、またはCiniiより検索の上、機関リポジトリよりご覧ください。第二十四輯の目録は以下です。

(講演)

- ・(講演録)紅樓夢の成立過程について
「資料編(当日配布資料)」 船越 達志
- ・中国文学側の視点からの禅林文学—柳宗元の受容を中心に— 太田 亨

(論文)

- ・應劭『風俗通義』十反篇訳注稿(下) 道家 春代
 - ・市立米沢図書館蔵『山谷詩集注』抄本刻・批注—「次韻王稚川客舎二首」 竹内 航治
大島絵莉香
 - ・黄庭堅詩析釈(二)—叔祖・叔父の隠詩詠 加藤 国安
 - ・“英雄譜”諸本について 氏岡 真士
- なお、今年より名古屋大学中国語学文学研究会例会の名称を、中部地区中文交流会に改めました。今年は6月中旬に愛知大学のご協力のもと、愛知大学名古屋キャンパスにて行われることとなりました。より多くの方々にご参加いただきますよう、お願い申し上げます。

(大島絵莉香 記)

京都大学中国文学会

◎第27回例会 2012年7月14日(土) 京都大学百周年時計台記念館

- ・天台外典利用考—『兼名苑』所収の唐代初期の造字故事について— 京都大学 佐藤 礼子
- ・女性史／ジェンダー史と中国古典詩文研究 奈良女子大学 野村 鮎子
- ・邵雍「歎喜吟」をめぐって 大阪大谷大学 森 博行
(平田 昌司 記)

中國藝文研究會

◎合評會及び研究會

2月12日(日) 合評會・研究會(立命館大學清心館五〇一教室)

『學林』53・54號合評

- ・浙刊宋版『廣韻』の版本系統について 董 偉華
- ・日本に於ける三国志受容と周瑜像について 岡本 淳子
- ・白夫人と法海—もう一つの白蛇傳變遷史— 谷口 義介

8月1日(水) 合評會・研究會(立命館大學研心館六四二教室)

『學林』55號合評

- ・『世説新語』及び『晉書』から見る王羲之の人物像と『蘭亭序』の眞偽問題 布谷 達朗
- ・『藝文類聚』の載録文について 高石 和典
- ・唐代傳奇小説『鶯鶯傳』の主題について 吉村 遼
- ・歐陽脩の夷陵時代—歐陽脩詩における夷陵時代の意義— 小泉 太郎

11月4日(日) 研究會(立命館大學研心館六四二教室)

- ・『藝文類聚』と『初學記』との関わりについて 高石 和典
- ・『太平廣記』から見る胡人イメージについて 井上枝里子
- ・黃圖璣『雷峰塔傳奇』にみえる西湖の水屬—白蛇傳變遷史(三)— 谷口 義介
- ・國內所藏『詩餘圖譜』について 萩原 正樹
- ・『乾隆四庫全書無板本』所收『江湖集』の鮑廷博識語について 芳村 弘道

◎刊行物

『學林』55號(6月)

(山内 貴 記)

東山之會

◎研究発表 於京都女子大學

3月10日

・陶淵明—その死の悲しみとの戦い— 下定 雅弘

4月28日

・六朝詩賦に見る薄葬論の受容と展開 嘉村 誠

5月26日

・研究餘瀝—詩文の譯註・注釋について思うこと—
二宮 俊博

6月30日

・唐鈔と宋版との懸隔—『白氏文集』の「四分類」を中心に
陳 翀

9月29日

・唐代の「鮑謝」 幸福 香織

11月17日

・王褒「僮約」について 上原 尉暢

12月22日

・唐代における愛好癖をめぐって 谷口 高志

◎『長江集』譯註(3月19日至12月22日)卷一「齋中」至「雙魚謠」
(愛甲 弘志 記)

阪神中哲談話会

第394回例会 8月4日(於茨木市福祉文化会館)

・『海中占』と「海人之占」—中国古代の占星術書—
前原あやの

第395回例会 12月1日(於茨木市市民会館)

・宋代婚礼説研究初探 緒方 賢一
(橋本 昭典 記)

大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

◎刊行物

『中国研究集刊』第54号[崗号](2012年6月)刊行。

『中国研究集刊』第55号[剣号](2012年12月)刊行。

(湯浅 邦弘 記)

大阪大学・名古屋大学中国学研究交流会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/lunwen/meidai/index.html>

◎第11回研究交流会 平成24年11月24日 大阪大学文学
部大会議室

・宗教儀礼に見る茶の利用—道教・密教の星辰崇拜を通して 張 名揚
・蘇軾詩における自注 山上 恵
・中井履軒の君子観 藤居 岳人
(湯浅 邦弘 記)

中国出土文献研究会

(平成22年10月より戦国楚簡研究会を改称。事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html>

◎研究会合

第48回研究会 平成24年7月15日～16日 大阪大学中国哲
学資料室

・浙江大学藏戦国楚簡の真偽問題について 福田 哲之
・「劃痕」について 竹田 健二
・上博楚簡『成王既邦』に関する一考察 金城 未来
・岳麓秦簡『占夢書』について 湯浅 邦弘
・上博楚簡『有皇将起』小考 福田 一也

第49回研究会 平成24年8月27日 上海新協通国際大酒店
会議室

・上博楚簡『成王既邦』に関する一考察 金城 未来
・竹簡背面に記された劃痕と竹簡の配列 竹田 健二
・上博楚簡『有皇将起』と『鶻鵠』の形制について
福田 一也

第50回研究会 平成24年8月29日 武漢大学簡帛研究中心
会議室

・上博楚簡『命』における政治思想 草野 友子

◎国内研究発表 平成24年5月25日

第四回日中学者中国古代史論壇「中国新出資料学の展
開」(日本教育会館)において、湯浅邦弘・竹田健二(分
科会I)、福田哲之(分科会II)が研究発表を行った。

・先秦兵学の展開 湯浅 邦弘
・上博楚簡『李頌』の文献的性格 竹田 健二
・漢簡『蒼頡篇』研究 福田 哲之

◎国際学術交流

平成23年11月～平成24年11月

草野友子が武漢大学簡帛研究中心の訪問学者として在外研究を行った。

平成24年2月～6月

金城未来が台湾師範大学文学院に留学した。なお、留学期間中の3月17日、4月21日、6月9日に、台湾師範大学にて開催された「出土文獻文字與語法讀書會與簡帛資料文哲讀書會合辦讀書會」に参加。また、6月20日～22日、台湾中央研究院にて開催された「第四屆國際漢學會議」(出土材料與新視野)に参加した。

平成24年5月11日～5月13日

東アジア文化交渉学会第四回国際学術大会(韓国・高麗大学)に湯浅邦弘・竹田健二が参加し、研究発表を行った。

- ・湯浅 邦弘 「漢代における『論語』の伝播」
- ・竹田 健二 「中井木菟麻呂の儒教観」

平成24年8月27日～9月1日

メンバー7名で、中国上海、武漢、長沙において簡牘資料の学術調査を行った。

- ・上海博物館を訪問して、上海博物館蔵戦国楚竹書(上博楚簡《弟子問》、《凡物流形》甲本・乙本、《武王踐阼》、《成王既邦》、《李頌》、《蘭賦》、《命》、《王居》、《志書乃言》、《有皇将起》)を実見し、葛亮研究員と会談した。
- ・武漢大学簡帛研究中心を訪問し、李天虹教授、劉国勝教授、宋華強副教授と会談した。
- ・湖南省長沙の岳麓書院を訪問し、陳松長教授の案内で、岳麓秦簡を実見した。
- ・湖南省文物考古研究書を訪問し、張春龍教授の案内で、里耶秦簡と郴州蘇仙橋三国吳簡を実見した。
- ・長沙簡牘博物館を訪問し、宋少華教授の案内で、西漢簡牘整理の状況を拝見した。

平成24年10月26日～28日

北京大学で開催された「簡牘與早期中國」學術研討會(第一屆出土文獻青年學者論壇)に、竹田健二、草野友子が参加。26日の特別講座にて竹田健二が講演、28日の学術研討会の「総合討論」にて草野友子が発表を行った。

- ・竹田健二「有關戰國楚簡背面劃線、墨線與竹簡的排序問題」
- ・草野友子「近年日本出土文獻研究概況—以“中國出土文獻研究會”爲中心」

平成24年11月17日～19日

武漢で開催された「中国簡帛學國際論壇二〇一二：秦簡牘研究」(武漢大学簡帛研究中心・北京大学出土文獻

研究所共同開催)に草野友子が参加、「銀雀山漢簡《爲國之過》的文獻結構與性質」と題して研究発表を行った。

(湯浅 邦弘 記)

中国中世文学会

◎平成24年度研究大会 平成24年10月20日 於広島大学 文学研究科

[研究発表]

- ・董仲舒は董永の子なのか—董永故事の変遷を中心に— 章 剣
- ・鮑照「白頭吟」の心情描写—「赤」「白」対を中心に— 小西 美代
- ・陰鏗詩における欠落感の詠出—「唯」「空」「餘」字に着目して— 市原 里美
- ・庾信伝と哀江南賦 森野 繁夫
- ・唱和集としての『輞川集』 橘 英範

[講演]

- ・關於《漢書・藝文志》“詩賦略”的分類及小序之有無的問題 吳 光興
- ・“禮儀”與“興象”—兼論“比”“興”差異— 王 秀臣
- ・關於《文選》舊註の整理問題 劉 躍進

◎刊行物

『中国中世文学研究』第60号(3月)

『中国中世文学研究』第61号(9月)

(富永 一登 記)

広島大学中国文学研究室研究会

第169回 平成24年1月27日

[修士論文最終発表]

- ・鮑照詩の表現—「思い」の具象化— 小西 美代
- ・幕末詩人原采蘋の生涯と漢詩 徐 萌

第170回 2月13日

[卒業論文最終発表会]

- ・「補江総白猿伝」における異世界の描写について 小野村奈苗
- ・梅堯臣詩研究—虫の詩を中心に— 大井 さき

第171回 5月28日

- ・魏晉南北朝小説と墓券に見られる冥界 許 飛

第172回 6月25日

[修士論文最終発表]

- ・近世日本における『西遊記』の受容—『五天竺』を中心に— 于 曉琪

[修士論文構想発表]

・梅堯臣詩研究 大井 さき
第173回 7月27日

[卒業論文中間発表会I]

・六朝の書論と文論の関係 志田 乙絵
・『太平広記』の「変化の術」 松嵯 未紗
・杜詩研究 堀中 美里
・欧陽脩古文の研究 渡部 雄之
第174回 11月30日

・六朝の書論の研究 志田 乙絵
・六朝から唐代への展開—変化の術を中心として 松嵯 未紗
・杜甫李白交友詩 堀中 美里
・欧陽脩の古文「記」に関する研究 渡部 雄之

第175回 12月21日

[修士論文中間発表会II]

・「奉道」考 本間 貴博
◎刊行物
『中国学研究論集』第28号(平成24年4月)
『中国学研究論集』第29号(平成24年12月)
(富永 一登 記)

広島大学中国思想文化学研究室研究会

第184回研究会 2月14日

[卒業論文発表会]

・論語における弟子 川野さとみ
・『荘子』の知について 重廣 史也
・荀子の「性」に関する一考察 上田 溪太
・董仲舒の災異説について 都野守美穂
・漢代瑞祥考 藤田 衛
・劉向『列女傳』研究—孽嬖傳を中心に— 鎌木 二葉

第185回研究会 11月15日

[卒業論文中間発表会]

・『荀子』の「天」についての再検討 佐藤 和俊
・元朝と許衡の「朱子学」 飯富 裕子

◎刊行物(発行人 東洋古典学研究会)

『東洋古典學研究』第33集(3月)

『東洋古典學研究』第34集(10月)

(市來津由彦 記)

山口中国学会例会

2012年7月14日(土)午後1時半～ 於山口大学人文学部2号館第5講義室

[講演]

・中国社会結構：基於“縁”的視野解説
武漢大学社会学系教授 桂 勝

[研究発表]

・『淮南子』椒真篇の思想的立場
山口大学教育学部 南部 英彦
・明代抽分竹木廠の組織と運営について
山口大学人文学部 滝野正二郎
(根ヶ山 徹 記)

第58回中国四国地区中国学会大会

6月2日(土) 開催校：広島大学 会場：広島大学東広島キャンパス

[研究発表]

・今本『周易』の卦序をめぐる一楚竹書『周易』を手がかりにして一
広島大学 末永 高康
・魏晋南北朝の墓券と小説に見られる冥界
広島大学大学院 許 飛
・朱子の理の根本問題 溝本 章治
・『金瓶梅』張竹坡批評の態度—金聖歎の継承と展開—
徳島大学 田中 智行

・高階正巽と『金瓶梅』—鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵『金瓶梅』を中心として— 広島大学 川島 優子
・儒家神道における国常立尊のあり方—理当心地神道における根源神— 広島大学大学院 韋 佳

[講演]

・経学研究逍遙 広島大学名誉教授 野間 文史
(市來津由彦 記)

九州中国学会

◎平成24年度(第60回)九州中国学会大会 5月12、13日

於福岡教育大学

5月12日

・一九六四年京劇現代戯観摩演出大会の開催始末
駱 丹
・日本敗戦直後の中国東北地域について 矢羽田朋子
・中国語の動詞アスペクトと概念構造 秋山 淳

- ・湖南学派胡寅について—その思想的特色—
古賀 崇雅
- ・明代における『搜神記』の刊行と胡応麟 雁木 誠
- ・科挙競争力からみた「明儒」の出身地域—地域の学力格差と思想文化—
鶴成 久章

5月13日

- ・中国における溝口雄三中国学 王 晶
- ・唐詩における蘇小小の再発現 彭 腊梅
- ・林訳『巴黎茶花女遺事』の語りと文体—「風景」の発見との関連において—
中里見 敬
- ・『莊子』秋水篇の〈濠梁説話〉をめぐる—郭沫若説の再検討を中心として—
植崎洋一郎
- ・清初における女流文学結社の成立—蕉園詩社を中心として—
李 恬
- ・顧頡剛の疑古学説に対する史料論的検討 竹元 規人
- ・林羅山『聖蹟図説諺解』に記録が残る明・鄧榮の跋について
竹村 則行

◎刊行物

『九州中国学会報』第50巻(2012年5月)

(中里見 敬 記)

九州大学中国文学会

◎中国文藝座談会

第257回 2月4日

- ・『史記』における項羽と劉邦像 大平 倫嵩
- ・陶晶孫の福岡滞在と九大フィルハーモニー会
幸島 光義
- ・「風景」の発見以前—中国古典小説の場合—
中里見 敬

- ・敦煌変文における近称指示詞の諸相 西山 猛

第258回 3月3日

- ・中国文学における子女描写 金見 正悟
- ・中国初学教育における『千字文』 吉田 光一
- ・明代文人の交友—王世貞と李攀龍の書簡を中心に—
土屋 育子
- ・三国戯中関羽的称谓問題 戚 世雋

第259回 4月28日

- ・胡応麟の小説蒐集—『搜神記』を手がかりに—
雁木 誠
- ・蕉園詩社の成立について 李 恬
- ・蘇軾父子と和陶詩 原田 愛
- ・元朝統治下の劉辰翁 奥野新太郎

第260回 8月4日

- ・武周革命と洛陽の詩歌 種村由季子
- ・楊万里と周必大 李 祥
- ・清末民初におけるマーク・トウェインの移入と日本—陳景韓訳「食人会」を例として—
梁 艶
- ・文人尺牘から書簡体文学へ—周作人の場合—
呉 紅華

第261回 9月15日

- ・崔令欽の「教坊記」製作について 劉 潔
- ・元禎「連昌宮詞」とその故地 長谷川真史
- ・留学時期における草野心平の詩風と徐玉諾
裴 亮

第262回 11月17日

- ・謝靈運の文学創作を支えたもの—「山居賦」とその自注を中心—
東 美緒
- ・『封神演義』の「鍾伯敬」評について 岩崎華奈子
- ・歐陽脩新発見書簡の特色について—新発見書簡 35「又(與孫威敏公)」、42「與劉侍讀」、69「與杜郎中」、70「又(與杜郎中)」の四篇と通行本書簡との重複内容に着目して—
東 英寿

第263回 12月22日

- ・孫武の生涯とその兵法 岡 駿介
- ・郭沫若「行路難」と佐賀熊の川温泉 田中 千絵
- ・中島敦と漢詩 榎本さやか
- ・北宋使遼関係詩考 中村 昌彦
- ・陳子龍の擬古詩について 中筋 健吉

◎刊行物

『中国文学論集』第41号(12月)

(奥野新太郎 記)



❖ 委員会報告

論文審査委員会

委員長 富永 一登

○学会報第65集応募論文の審査の経緯

2013年1月20日締め切りの応募論文は全28編(哲学・思想部門12編、文学・語学部門14編、両分野での審査希望1編、日本漢学部門1編)であった。1月26日に論文審査委員会を開催し、論文1編につき3名の査読委員(論文審査委員会委員1名を含む)を決め、査読委員となった論文審査委員会委員が閲読者を兼ねることとした。依頼論文4編の閲読者も決定した。

3月30日開催の論文審査委員会(牧角悦子副理事長陪席)で、査読者3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門6編、文学・語学部門5編、日本漢学部門1編の計12編の掲載を決めた。

○その他、3月30日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第66集依頼論文執筆候補者2名を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・哲学思想部門、文学語学部門から各1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。あわせて、受賞理由執筆者を決めた。
- ・平成25年度日本学術振興会奨励賞推薦者を選定し、理事会に推薦することとした。
- ・理事会の依頼、出版委員会の修正案をもとに、「論文執筆要領」について審議し、以下の修正を理事会に提案することとした。

(1)「論文執筆要領」8. の一部修正

(旧)原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として正漢字体(印刷標準字体)に統一する。

(修正案)原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として旧漢

字体(印刷標準字体)に統一する。但し、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。

(2)「論文執筆要領」18. の全文修正

(旧)掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

(修正案)論文抜刷作成費用は本人負担とする。

※この二つの修正案は、3月31日の理事会で承認されました。第66集の投稿に当たっては、「学会便り」に掲載されている「論文執筆要領」に従うようお願いします。

※なお、「論文執筆要領」13. に記載されている書留による郵送については、差し出しと受け取りの証明が残るもの(赤のレターパック、宅急便、海外から発送するEMS等)で、1月20日以前の消印があるものであれば有効です。但し、赤のレターパックの場合は、1月20日以前の消印が押されることを確認の上で投函願います。また、従来どおり、持参は認めませんので、ご注意ください。



❖ 2013・2014年度 役員／各種委員会委員 一覽

理事長 川合 康三

副理事長 神塚 淑子 和田 英信

理事 赤井 益久 浅見 洋二 岡崎 由美
 加藤 国安 釜谷 武志 小島 毅
 佐竹 保子 佐藤鍊太郎 静永 健
 土田健次郎 富永 一登 藤井 省三
 平田 昌司 渡邊 義浩

監事 内山 精也 大島 晃 牧角 悦子

評議員 赤井 益久 阿川 修三 浅野 裕一
 浅見 洋二 吾妻 重二 安藤 信廣
 井川 義次 池田 秀三 市川 桃子
 市來津由彦 井波 律子 岩田 礼
 内山 精也 宇野 茂彦 大上 正美
 大木 康 大島 晃 大西 克也
 岡崎 由美 垣内 景子 加藤 国安
 加藤 敏 門脇 廣文 釜谷 武志
 神塚 淑子 川合 康三 木津 祐子
 金 文京 小島 毅 後藤 秋正
 小松 建男 近藤 浩之 齋藤 希史
 坂元ひろ子 佐竹 保子 佐藤鍊太郎
 静永 健 柴田 篤 白水 紀子
 竹村 則行 土田健次郎 戸倉 英美
 富永 一登 二階堂善弘 野間 文史
 野村 鮎子 花登 正宏 東 英寿
 平田 昌司 藤井 省三 古屋 昭弘
 堀池 信夫 牧角 悦子 松浦 恆雄
 松原 朗 三浦 秀一 山田 利明
 湯浅 邦弘 和田 英信 渡邊 義浩

顧問 荒木 見悟 池田 知久 石川 忠久
 今鷹 真 岡村 繁 加地 伸行
 興膳 宏 戸川 芳郎 福井 文雅
 町田 三郎 村山 吉廣

幹事 高芝 麻子 宮本 徹

(日本中国学会評議員会 2012年10月5日確定)

◎：委員長 ○：副委員長

大会委員会 ◎赤井 益久 ○佐竹 保子
 市川 桃子 乾 源俊
 坂井多穂子 橘 英範
 諸田 龍美 弐 和順
 (幹事)鈴木 崇義

論文審査委員会 ◎富永 一登 ○浅見 洋二
 ○小島 毅 市來津由彦
 内山 精也 大塚 秀高
 影山 輝國 金 文京
 近藤 浩之 佐藤 進
 佐藤 晴彦 中 純夫
 中西 久味 野村 鮎子
 東 英寿 福山 泰男
 町 泉寿郎 柳川 順子
 山口 守
 (幹事)木村 守

出版委員会 ◎釜谷 武志 ○岡崎 由美
 ○加藤 国安 荒川 清秀
 佐藤 正光 林 克
 松江 崇
 (幹事)佐藤 浩一

選挙管理委員会 ◎土田健次郎 ○松原 朗
 恩田 裕正 垣内 景子
 陳 捷 吉田 篤志
 鷲野 正明
 (幹事)宮下 和大

研究推進・国際交流委員会 ◎藤井 省三 ○静永 健
 吾妻 重二 古屋 昭弘
 松村 茂樹
 (幹事)王 俊文

❖ 事務局より

広報委員会

◎平田 昌司
井川 義次
辛 賢
二階堂善弘
(幹事)高橋 康浩

○渡邊 義浩
梅川 純代
仙石 知子

将来計画特別委員会

◎佐藤錬太郎
大形 徹
長尾 直茂
佐藤 正光(兼任)
町 泉寿郎(兼任)
(幹事)松崎 哲之

○三浦 秀一
宇佐美文理



◎広報委員会の新設について

このたびホームページ特別委員会を発展的に解消し、ホームページの運営、学会諸事業の広報、データベースの作成・管理等を業務とする広報委員会を新設することとなりました。

◎住所変更と名簿への掲載について

住所・所属機関等の変更は、速やかに事務局までご通知ください。通知は、メール・書面もしくはファックス、振替用紙通信欄にてお願いします。

10月発行の会員名簿には、8月末までにお知らせいただいた会員情報を掲載させていただきます。それ以降の変更については次年度に掲載となりますので、ご了承ください。

なお、従来、「会員名簿」には固定電話番号(自宅または勤務先)のみを掲載しておりましたが、今年度から携帯電話番号も掲載できることといたしました。携帯番号を名簿に掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います(ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を名簿に掲載することはありません)。

◎寄付について

第64回大会準備会(代表:大阪市立大学・齋藤茂会員)より学会に対し、「大会無事終了の感謝の気持ちを表すため」として金5万円のご寄付を頂戴しました。ここに広く会員の皆さまにお知らせするとともに、齋藤会員をはじめ関係各位に改めてお礼申し上げます。

訃報

昨年度『学会便り』第2号発行以降、以下の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(敬称略)

太田 次男	(関東地区)	2013年2月16日
菅原 悟	(関東地区)	2012年6月
中村 俊也	(関東地区)	2013年3月12日
渡部 昭夫	(中部地区)	2012年8月2日
大西 晴隆	(近畿地区)	2012年7月
間嶋 潤一	(中国・四国地区)	2012年11月6日

「日本中国学会報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用いる。なお、第1ページの見易い場所に、投稿原稿を1行20字毎ページ20行に変換した場合の枚数を明記する。原稿量の上限は、字数ではなく、枚数によるので注意する。手書きの場合は電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。但し、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所にも明記する。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあつては、ウェード式・漢語・拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通

用している固有名詞（例：孫逸仙Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内 日本中国学会
14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校 正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜 刷

18. 論文抜刷作成費用は本人負担とする。

そ の 他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）

（平成13年5月13日修正）

（平成14年10月13日一部修正）

（平成15年10月5日一部修正）

（平成19年10月7日一部修正）

（平成20年5月17日一部修正）

（平成21年10月11日一部修正）

（平成22年6月6日一部修正）

（平成22年10月10日一部修正）

（平成23年10月9日一部修正）

（平成24年10月7日一部修正）

（平成25年3月31日一部修正）

第二回若手シンポジウム(仮称) 開催の予告

同シンポジウム実施委員長 静永 健

2年前の震災直後という大混乱の中で開催された「第一回日本中国学会若手シンポジウム」は、昨年、論文集『中国学の新局面』刊行を以て全作業が完了した。「では第二回は……?」という声が折にふれ多くの方々より聞かれた。同時に、前回の開催のあり方についての反省点もさまざまに寄せられた(地方開催の可能性、年齢制限の緩和等)。そこで去る3月31日の理事会(新旧理事合同)において、このことが協議され、まずは第二回シンポジウムのすみやかな開催が了承された。現在、その募集要項の詳細について実施委員会において協議中であるが、さらに学会諸方面のご協力を得て、以下の日程で「第二回シンポ」を開催することと致しました。

記

日時：2013年10月14日(月・体育の日)午前中

会場：秋田大学

部会：第一部会(唐以前の哲学・歴史学・文学・語学)
第二部会(宋～清の哲学・歴史学・文学・語学)
第三部会(近現代の哲学・歴史学・文学・語学)
第四部会(日本漢学・比較文学・漢文教育)

各発表時間：発表20分(日本語による)
コメント5分・討論15分(中国語も可)

コア・テーマ：5月末に学会HPに発表(発表応募者多数の場合、梗概による書類選考があります)

募集期間：2013年7月1日開始
(詳細は同じく5月末に学会HPに掲載)

応募受付・事前問い合わせ先：
静永 健(九州大学文学部)
shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp
Tel 092-642-4150
(平日の昼間のみ、なるべくメールでお願いします)

シンポ開催に当たって、本大会終了直後にも関わらず引き続き会場を提供して下さる秋田大学の大会準備会の各先生方に篤く御礼を申し上げます。

なお従来より「若手…」という名称を冠することに疑問の声があり、現在、シンポ実施委員会において改称することを検討中です。また、それに伴って前回「50歳以下」としていた規制を緩和し、傍聴・参加者およびコメントーターについては完全オープンに。そして発表者についても海外研究者及び留学生の参加を促すため、若干の引き上げを検討中(かつ未入会者を歓迎したい)。

また、シンポジウムの趣旨を明確にし、各発表の関係性を高めるために核となるテーマを設定し、それに即して発表および討論を構成しようと考えています。詳しくはこれも5月末公開の学会HPをご覧いただきたいが、現時点での試案を述べるならば、「新局面」と銘打たれた前回に対し、今回は「中国学の復興(もしくは復活)」をどうかと考えています。古典の復興、伝統儒学の復活は時代を通じた中国学のテーマであり、古文復興のみならず、人面桃花の故事のような死者の復活、魯迅が呐喊しようとした近代の苦悩など、文学にも共通するテーマではないかと考えるからです。もちろん、目下わたくしたちが直面している震災からの復興、アジア諸国の関係改善、そして当学会そのものの活性化を、このテーマの中に祈りとして込めたいという思いがあります。

ただし今回は『論文集』の刊行を見送ります。

会員の皆様の温かいご支援と、ご協力、そして何よりも学界の将来をにう次の世代の方々への発表応募を心より待ち望んでおります。

【日本中国学会ホームページ：日本語版】

<http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi>

(「第二回シンポ開催のお知らせと研究発表募集」は5月末、ここに掲載します。)

第六十五回大会開催のお知らせと研究発表募集

会員各位

陽春桜花の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第六十五回大会は秋田大学が準備を担当し、本年10月12日(土)、13日(日)の両日に秋田大学手形キャンパスにおきまして開催することとなりました。

つきましては、下記の要領にて研究発表を募集いたしますので、奮ってご応募くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

平成25年(2013)4月吉日
日本中国学会第六十五回大会準備会代表
吉永慎二郎

記

1. 部会 : 一、哲学・思想部会
二、文学・語学部会
三、日本漢文部会 (日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など)
2. 時間 : 発表20分 質疑応答10分
3. 締め切り : 平成25年(2013)6月30日(日)(当日消印有効)
4. 郵送宛先 : 〒010-8502 秋田市手形学園町一番一号 秋田大学教育文化学部内
日本中国学会第六十五回大会準備会 吉永慎二郎 宛
5. 発表概要 : 発表は、学術研究の最新の成果で、未公開のものに限ります。
発表ご希望の会員は、氏名(ふりがな)・所属・発表部会を明記の上、印字した発表題目及び概要(800字以内)を締め切り日までに大会準備会宛に郵送にてお届けください。
併せて概要についてはEメールの添付ファイルにて下記アドレスまでお送りください。
また、執筆者による校正はありませんので、完全原稿にてお願い致します。
なお、応募者多数の場合には、やむを得ずご発表をお断りする事もございますので、ご了承ください。
6. 問合せ先 : E-mail : yosinaga@ed.akita-u.ac.jp
TEL: 018-889-2609 (吉永研究室)
FAX: 018-889-2603 (人文事務室)